

かしのしづ枝 中島広足

幽遠随筆 入江昌喜

松屋叢考 高田与清

宮川舍漫筆 宮川政運

駒谷芻言 松村梅岡

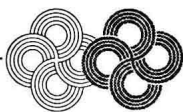
16

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第一期 第八卷
昭和二年十一月廿八日發行
編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表 早川純三郎
發行者 吉川半七
發行所 日本隨筆大成刊行會



日本隨筆大成

〈第一期〉 16

昭和五十一年一月三十日 印刷
昭和五十一年二月十五日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

發行者 吉川圭三

發行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五二（代表）
振替口座東京二四四番

製作 株式會社 たんちよう社

解 題

本集には、かしのしづ枝、幽遠隨筆、松屋叢考、宮川含漫筆、駒谷獨言の五種を収める。

かしのしづ枝 二卷 刊

なかしま ひろた
中島 広足 著

本書は、同じ著者の「海人のくゞつ」（本大成一期十卷所収）の続稿とも云うべきもので、歌詞、歌謡等多くは著者の研究余滴と云うか、永年の書留めをまとめたものである。この事は、男広定の序文によって明らかである。題名は著者の号檀園による事勿論である。内容上下二卷、「菊のきせわた」以下「西行法師」に至る通計七十二項である。本書は嘉永四年十二月に成り同六年三月に刊行せられた。嘉永四年は広足既に齡六十である。多くの故旧知友も歿したものが多し。この言語隨筆に於いても亦、歌詞の論などに、千蔭、守部等多くの知友の著書にも言及するものがある。この頃はもう筑紫に於ける国学の大家として尊重せられていた。広足の文章に就いては、既に早くより定評があり、本居大平が近藤光輔（天保十二年歿、年六十一）に送った手紙に左のようにある。

……此節はじめてひろたり子の文章見申候。さて／＼よくかゝれ候事感心致し候。だん／＼後世に英才の人出で来る事に御座候。

当時能文家として、村田春海、清水浜臣等と名を齊しくしていたと云われている。

本書再刊に当っては、内閣文庫蔵嘉永六年刊本を以て校合を行った。国書総目録を見ると、大阪府立図書館に稿本が存している事が知られるが、私は見ていない。活字本としては、本大成旧刊一期八

巻及び『中島広足全集』によって流布している。

中島広足については、本大成一期第三巻「檀園隨筆」の項に小記したからそれを見られたい。

幽 遠 隨 筆 二 卷 刊

入 江 昌 喜 著

本書は、大阪の町人学者として江田世恭とともに高名な著者入江昌喜の処女作である。昌喜は早く父の死去にあい、家業は兄節久が継いだのであるが、此の兄も歿した後は養子昌久を助けて家業を勤むる事二十余年、四十七歳の頃やっと高津に隠棲して、家を幽遠窟と号し、好きな道、学事に専になるを得た。而して第一の著作がこの幽遠隨筆二巻である。安永二年、昌喜は父の道喜の五十年忌を営み、其の翌年本書の刊行を行い、初めて学者として其の第一歩を踏み出したのであった。内容は、先年来手を染めていた句作をまとめたり、長年古典に親しみ研究した精華としての諸種の記事やら、現代に残る語詞の出典を古書に索めたりして、所謂研究家の著作と云うよりは、如何にも好学の士の其の時代に即した著述と云う感の深い著述である。たまたま著者が俳諧に心を寄せていたため、半時庵淡々の「二書一卷と号して、門人伝授大秘」とする書に言及、其の他数条に淡々の非を評した項が淡々門人の忌む所となり、竟に翌年には絶版となったと云う事である。松木淡々は生前其の道の大家として、多くの門人を擁していたが、晩年は大いに人を欺き、「俳諧流行車輪の如くすべし」と門人に教訓したと伝えられている。宝暦十一年十一月二日に歿し、享年八十八。依て本書の絶版になったのも其の徒門人の抗議であるが、淡々の当時門人の多かった事と、その人柄の面白からぬ人物であった事はこの絶版事件でも思われる事である。下巻にある「父道喜居士五十回忌追悼のことば」なども、昌喜の人柄が偲ばれる一文である。

本書には巻頭に友人丹叟の序文と、獅々童と署名した自序がある。

本書の再刊に当って、内閣文庫蔵刊本によって校合を行った。活字本としては旧大成本第一期八巻に収められて流布している。

入江昌喜は、享保七年六月廿一日浪華の商家榎並屋に生れた。父は道喜。商売は質屋であつたとも云うが、実際には定かでない。通称半次郎、長輔とも云つた。号は獅子童、狻猊子、幽遠窟、浪速蘆父等とも称した。もとより学問好きであつたが、此れに一生専念するわけにはいかなかった。其の一生は営業と商売両面に心を配らなければならぬ時が多かつた。「異名分類抄」四巻は、物の異名を天部地節などに分類した一種の辞書であるが、此れは後年落合直文著『言泉』に収められたと云う事である。その他「久保之取蛇尾」三巻など多いが、寛政七年妙法院宮真仁親王の令旨により、「万葉類葉抄補闕」を完成献上、寛政十二年庚申八月十二日に歿した。享年七十九。墓は小橋寺町梅松院にある。墓誌名を頼春水が草している。昌喜の周囲の師友には皆名家が多い。小沢蘆庵の如き其の一人で、妙法院真仁親王に昌喜を推薦したのは恐らく蘆庵であろう。今一人是非昌喜の周囲の人物として注意したい人に幽遠隨筆以下殆んど全部の昌喜の刊行書の版下を草した高安蘆屋がある。高安蘆屋に關しては『森銑三著作集』第四巻に「高安蘆屋」、「高安蘆屋遺事」があるから、それを見られたい。入江昌喜については、入江昌喜翁事蹟顕彰会編『入江昌喜翁』昭和四十九年五月発行があつて、最も詳かである。巻末には年譜等の外に、小寺純雄編「入江昌喜研究文献目録」が附してある。

松屋叢考 三巻刊

高田 与清 著

本書には、三樹考、三絃考、歌詞考の三種が収められている。与清の本領は多くの蔵書を擁して、

先ず索引を作りそれから考証に進むことにあった。文化十二年八月十日には、「了阿与清と共に随筆目録を編輯せんと、共に安斎隨筆をよむ」と云う記事が『擁書樓日記』に見えている。了阿のこの種の稿は無窮会や静嘉堂文庫に自筆稿が残っている。与清の方は其の膨大な量が水戸家に納められ彰考館に現存するかと思う。此のように索引が整備すれば、次には与清の多くの考証がまとめられる事となり、その一部はこの松屋叢考、即ち三樹考、三絃考、歌詞考の刊行せられるに至ったのであった。

三樹考は、賢木、桂、櫨について四十八則を立てて仔細に考証している。其の他、現代でも時々好事家の問題にするナンジャモンジャの木にも言及している。巻頭に『本草図譜』の著者岩崎灌園筆の「銀木屋、金木屋」以下六葉の画譜が掲げてある。引用書目は通計五十五部、巻末に、文政九年三月門人田吹重明 中野義接同校と、校者の名が著してある。

三絃考は、「神楽の濫觴」に初まり「馬尾胡琴」に終る。三絃のことは、三絃の始、三絃伝来其の外多いが、「平家曲」^{ヘイケブシ}、「浄瑠璃曲」^{ジャウリブシ}等もあり「馬尾胡琴」に至る音楽考証である。巻頭に鏃形紹意筆の「琉球製蛇皮線図」以下五葉の図版が掲げてある。蕙斎とは与清親しい間柄であったが、文政七年に既に鬼籍に入っているから紹意はその後を継いだ人であろうか。引用書は百四十五部とある。この巻には『骨董集』まで引合に出されている。文政九年六月 門人間宮升芳 林堯臣同校とある。国学者間宮升芳は名一郎、号拙斎、神田佐柄町住、津田氏の家臣と天保十三年刊の『広益諸家人名録』に見えている。静嘉堂文庫には、この人の自筆書入本があって、古今和歌集下巻巻末には、「天保十一年四月五日師翁本書入了、朔日起筆二日了。間宮升芳」と記しており、職原抄には師与清と共に書入をしている。手控にあったので附記しておく。

歌詞考、「みたまのふゆ」以下「はし鷹のこもつちごゑ」に至る八歌詞の考証である。この考の引

用書は九十四部である。巻頭に「円光大師画伝卅四の巻所載、梶緒の図」以下五葉の画図の摸写がある。奉三師命「摸写、藤原善一「えひのや」とある。この藤原善一は江戸の人で田沼善一、えびのやと号し、「筆の御霊」の著がある。巻末には、文政九年七月 門人香取強麿、阿部正名同校とある。

内容考証の博覧のこと三考とも同様である。

本書は刊本、写本共諸所に伝えられているが、活字流布本は『随筆文学選集』八、十一、十二の巻に、本大成本では第一期八巻に収められている。再刊に当っては国会図書館、内閣文庫等の蔵本に依つて校合を行った。小山田与清については、本大成第二期二巻の解題に小記したからそれを見られたい。

宮川 舍漫筆 五巻

宮川みやがわ政運まさゆき 著

本書には安政五年の叩端山人の序があつて著者が志賀理斎の次子で、宮川氏の養子となり、生父に似て文を好み山水を愛し、句を摘み章を終つて、其の草稿が庫に満ちたので、宮川舍漫筆と名づけて刊行する意を述べて居り、自序にも永年書留たものを蠹魚の住み家にせんも本意なきまゝ浄書して「只流による塵ひぢをすくひ上たる物なれば、これぞ宮川舍の筆ならめと爾云ふ」と記している。

第一巻の「義士大石瀬左衛門手紙」から、第五巻の「大神宮御神徳并御蔭参りの事」に至る六十三条である。所謂学者の研究余滴と云うものではなく、趣味家の見聞奇談などとして気楽に見られる随筆である。第一巻の「松岡氏辞世」では、松岡氏は著者が一時義子となり、凡十有二年間礼楽射御書数其の他の高恩を受け筆紙に尽し難しと云っている。著者の文学好きは生父理斎の血を引くと共に、この松岡氏こと橘定孝の訓育によるものと見られよう。此の橘定孝は彫刻を業とし、俳諧を嗜み雅名

を琴鳥園花因と号したとある。俳人の書は時々出て来るが「錦花翁隆志といへる俳人の附句に、芸が身を助くる不仕合、これ名句にして、みな人の口癖にいへるなり」とある。この句を知らぬ人はなからうが、此の作者を知っている人は少なからう。

この書には当然であらうが、「理齋翁未来記」と云う珍文もある。それから富士行者の初代から六世までの略伝のあるのも、やや異色の記事であらう。全体としてさして格調の高いものとは云いかねるが、見ていて楽しめる随筆である。本書は自序等で安政五年には稿が完成していた事が知られるが、実際刊行されたのは文久二年である。本書が活字本として流布したのは、『日本随筆全集』第十、『日本随筆大成』第一期八巻である。本書再刊に当っては国会図書館蔵、文久二年刊本を以て比較した。

宮川政運は、志賀理齋の次男である。早き日に松岡氏の義子となり、十有二年その薫陶を受けた。然るに文政三年定孝が歿し、障る事があって此の家を去り、宮川氏の養子となった。好学の人柄で性山水を愛し、江戸近辺の名所旧蹟は温ねて至らざるなく、行けば必ずその見聞を筆録したという。蓋し生父理齋翁の天分を受継れた事であらう。かくして本書も成り、次弟原徳齋の名は本書中に見えるが文久二年には徳齋補訂を経、柳川重信の画図を加えて、東都三笠堂から新刻されたと云う。柳川重信は理齋の第四子で、天保三年十一月二十八日、四十六歳で歿しているから、其画図もそれ以前に画かれていたものであらう。ここに一番遺憾のことは、宮川政運の伝の全く不明の事である。その歿年享年さえも不明である。掃苔家など人物研究の示教を待つことである。

駒谷 獨言 一卷

松村梅岡 著

本書は駒込に住して門人達を教えること二十年、同業の人も多いが、世には誤認せられている事が多い。自分の門人には博識を求める事をせず、誤認無からしめんとしている。其のような事を時々雑話したのを好事のものが集めて、此のようなあやしい冊子となった。間々先輩を批評した処もあるが、門人共に示すだけであるから遠慮もいらない。書名も、暗燈、覚夢編、斥儒編などと命じた人もあるが、これらは争の端を生ぜんかと、駒谷獨言と名づけたと天明二年の自序に草している。書名のことも其の内容の大様もこの文に尽されている。今少し冗言を弄するならば、当時の学者等が漢土の事物の名称を日本のものに移す場合に生じた錯誤や不用意に生ずる漢語の失当等を難じ、初学に『蒙求』を読む心得を教えなどもしている。其の論難の一例として、最も短い一文を引用すると、

○或高名ノ詩人ノ句ニ、云飽ニ人間ト作レリ。人間世ノ俗塵ニ久シク混ジ染テ、倦厭フ心ナラシ。然ドモ飽ノ字ハ食ニアキタルナレバ、此人人肉ヲ食セシニヤ。

此のような手厳しい調子に破顔する所もある。附録として「詩談」十二条を添えている。寛政五年春改写とある。本書は自筆本が無窮会に存している事が知られ、本大成の旧刊本もこれに拠っている。今再刊に当たってもやはり無窮会本によって校合を行った。外には内閣文庫、静嘉堂文庫、東北大学狩野文庫、国会図書館鵜軒文庫等にも写本が蔵されている。

松村梅岡 名は延年、太仲、字は子長、梅岡はその号である。江戸の詩文家として宝暦天明時代には名の聞えた学者であった。平野金華、高野蘭亭等の門人である。世上俗儒の誤などは、本書に忌憚なく陳^べられているが、これのみが梅岡の姿ではない。森銑三氏は曾て「河津美樹の妻清原氏」なる一

文を『心の花』に投じて加藤美樹の前妻葛の人柄のよかった事を紹介して居られる。其の拠る所が『梅岡先生集巻』の九、十中の「孝順孺人清氏墓誌銘及清氏逸事」にあったのであった。梅岡の人柄はこれらの両面の文章を一読して初めて全きを得るのであろう。梅岡は天明四年、七十五歳で歿した。

目次

かしのしづ枝……………一
幽遠隨筆……………六五
松屋叢考……………一五五
宮川舎漫筆……………二四三
駒谷芻言……………三五三

(解題 丸山季夫)

榲乃志茂枝

わが父翁のわかき時より、かりそめの心やりに一くだりづゝ書出られたるものどものかずおほくつもりにたるを、さきに人々のこへるによりて、いさゝかとりいでゝ、かしのくち葉と名づけられ、又さらにあまのくゞつとて、ひろひ入れし筆すさびなどもあるを、三巻四巻はやがて板にゑらしめつ。かくてなほのこれるがさはなるを、おのれまたことにものして、此二巻となしつるは、かれこれを見わたして、園の名におふ櫃の木立をも、やゝ近くあふぎ見るべきものなるべし。かれこたびは其しづえをよづるころばへもて、かくは名づけつるにこそ。

嘉永四年十二月望の日

中 島 広 定

しるす

目次

上巻

菊のきせわた	公任卿のうた	山ある	つらといふ詞	おもかげ	しもつやみ	すぐろ	きみ	人長	臥木の天河	十市の仮字	後撰集の歌の仮字違ひ	にしの国のうた	なげ	にせゑ
--------	--------	-----	--------	------	-------	-----	----	----	-------	-------	------------	---------	----	-----

九 一〇 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二

さゆる	しのゝをふどき	玉まく葛	さいたつま	みくづ もくづ	波にはなるゝ	をせなか	いけすき	かねのね	木枕	語の下におくい文字	初学のためにいへる題の心ふたつ	景樹が評の歌	かなしみの歌	信夫郡
-----	---------	------	-------	---------	--------	------	------	------	----	-----------	-----------------	--------	--------	-----

五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五